



APAYeNEWS

アジア・太平洋Y M C A同盟月報 No.06/2010年9月～10月

翻訳協力：荒木勇磨

1. 第3回 Uni-Y 会議 2010：アジア太平洋 Uni-Y 週間、フィリピンのバギオにて宣言

今年のアジア太平洋地域Uni-Y会議にあわせ、フィリピン・バギオ市議会は2010年10月18-24日をアジア太平洋Uni-Y週間とすると宣言しました。2010年度第217号決議であるこの特別な厚意は、今回の会議の会場にバギオ市を選んだことやユースの取り組みなどが評価されたことによります。APAYがこのような優遇をうけたことは初めてのことです。

若い参加者やスタッフ達がY M C Aインド、インドネシア、日本、ミャンマー、メトロポリタンシンガポール、アメリカ、フィリピンより集まり、共に学び分かち合う予定です。本年度のテーマは“*Bayanihan* 2010: Live, Work, Help ~ Together, We Transform Lives”であり、*Bayanihan*というフィリピンの伝統的な言葉の中に含まれる、ユースのリーダーシップとボランティアリズムを強調したものとなっています。また、多様性、平等、万人への参加、といったものを尊重しつつ社会をより良くしていくことへの期待も込められています。ただ単にコミュニティの中の一員としてではなく、共に作業をするということ自体を重視しているのです。

地元カレッジYのメンバーによって構成される準備委員会は、革新的なプログラム、イベントを企画してきました。その一つとして「the Assembly Tales」が挙げられます。既存のUni-Y活動や過去2回の会議に対する祝福が行われる予定です。「ボランティアリズムへの歩み」では、ユースや社会に対して大きな影響を持つ課題に対するアドボカシーやボランティア活動へ意識を向けていけるよう構成されています。夜明けの散歩はすべての参加者にとって刺激的な体験となることでしょう。

今回ホストを務め、会議開催に向けてサポートしていただいたフィリピンY M C A同盟、Y M C Aバギオに感謝申し上げます。

* 日本からは学生Y M C Aメンバーを中心に7名が参加しました。台風に伴い、プログラムが変更して行われました。

2. アドバンスコース 2010

今年度のアドバンスコースには中国(2)、香港(2)、日本(1)、インド(1)、韓国(2)、ミャンマー(2)、フィリピン(1)、スリランカ(1)、アフリカ同盟(1)、から計13名が参加することとなりました。11月16日には開会式と晩餐会が香港Y M C Aにて行われる予定です。プログラムは参加者間での“Life Moments”共有から始まります。“Life Moments”とは、自然に学び、分かち合いながらコミュニティ作りを行う方法のことです。この活動を通して参加者、人々、それぞれのY M C Aに対して、深い理解や思いやりが持たれることとなるでしょう。各参加者は個々の経験を、地域や国家における政治的・社会的関係や仕事における結びつきとの中で持っており、それがこの活動の土台となります。今年度のアドバンスコースでは運動強化により重きをおいており、これはプロフェッショナルリーダー達を育成することによって達成されると考えています。第28回アドバンスコースは11月14日から12月12日まで、香港中華Y M C Aのウーカイシャユースヴィレッジにて行われます。

* 日本からは金弘明氏（在日本韓国Y M C A職員）が参加します。

3. Y M C Aスタッフ、スリランカの SOP に参加

第1回スクールオブピース(SOP)は APAY が Cooperation Forum (ICF) 、CCA と共同で運営するプログラムで、11 カ国 21 人の参加が予定されています。スリランカのコロンボ近郊にある Y M C A 国際ホテルがホストとなり、参加者の出身国はバングラデシュ、ミャンマー、カンボジア、インド、インドネシア、ネパール、フィリピン、スリランカとなっています。さらに、現在スリランカ Y M C A 同盟で活動をしている3名のインターン(ケニア、パレスチナ、スーダン)も参加する予定となっています。

10月に始まる3週間のプログラムを通して、参加者は互いに異なるアイデンティティ、宗教、信仰、それらに対する反応に関して深く考えることとなります。また、仏教、キリスト教、ヒンドゥー教、イスラム教といった異なる各々の宗教が、正義や平和に対してどのような教えを持っているのかについても学びます。さらに、このプログラムの重要なプログラムとして、スリランカ国内4地域へのフィールドトリップが挙げられます。それぞれの地域ではスリランカ独自の文脈における暴力の存在とその社会への影響を学ぶことが求められています。インプットのための第1週、フィールドに出る第2週を経て、参加者に最後の1週間に大きな変化がもたらされることが期待されています。

4. ジェンダーワークショップ 2010 - 体験型ワークショップ -

「ジェンダーと持続可能な開発 経済的エンパワーメントを中心に」をテーマとしたワークショップが9月24-28日にインドのブネ Y M C A で開催されました。ワークショップは体験型のもので、参加者はそれぞれの経験を分かち合い、それらをいかに統合化するか学びました。講義やワークショップを経て、課題解決の方法や提案へとつなげていきました。「見る - 聞く - 学ぶ」というアプローチは革新的なもので、参加者がなすべきことと互いの経験を共有するために、最適な雰囲気を作り出す方法を学ぶことができます。

インド Y M C A 理事長 Mr. K John Cherian、ブネ Y M C A 理事長 Mr. Vivek Aranha、アジア・太平洋 Y M C A 同盟ジェンダーの公正委員会委員長 Dr. Patcharawan Sirsilapan、インド Y M C A 女性のエンパワーメントとジェンダーの公正委員会委員長 Dr. Ann Thomas、インド Y M C A 総主事 Mr. John Varughese という華やかな列席者とともに、アジア・太平洋 Y M C A 同盟総主事 山田公平氏により開会が宣言されました。



基調講演ではブネ Y M C A ディレクターの Dr. Neela B. Onawale により、彼女自身の体験が語られました。Onawale 氏は1975年に新しいグループを立ち上げ、エンパワーメントを目標としたキャパシティビルディングや都市・農村開発プログラムを実施してきました。Onawale 氏は市民として何が 필요한のかを個々人に対しインプットを行い、生きるために必要なスキルについて語りました。インドの女性識字率が急上昇しているのは幸運なことであり、教育は女性たち、そしてその家族にとって正しい選択をする手助けとなるだろうと述べました。



Mercy Kappen 氏により、強い対話性をもつ「ジェンダーセンシティブティトレーニング」が行われ、とても活気に溢れたセッションとなりました。ジェンダーに関する現状の描写、そこで表現された美德は参加者に大きな印象を与えることとなりました。訓練モジュールはジェンダーへの気付きとジェンダーセンシティブティへの関心を喚起することを目的としています。相互作用、時おり現れるユーモア、物まね、

といった要素はこのセッションを特に印象付ける上で役立ったようです。

Puneのインテグリティ基金から来ていただいたRevd. Dr. Jonathan Bordeによるセッションでは「経済エンパワーメントのためのアクションに、どうすれば女性を巻き込めるか」をテーマとして行われました。発表の中ではスラムや掘っ立て小屋に住む何千もの人々の生活を改善するためにどのような試みが行われてきたのか、語られました。

統合型スラム改善プログラムや女性エンパワーメントを目指したBorde氏のプログラムの姿は非常に美しく表現され、昼食後のソーシャルエクスポージャーへの関心を掻きたてる興味深い導入となりました。

その後、参加者は隣接するスラムへのツアーに参加し、インテグリティ基金による経済エンパワーメントへの取り組みや成功例について学びました。また、起業活動を支援するためにこの基金が行っているユニークな試みについてMr. Bobby Mennonより講義を受けました。参加者はこの計画がいかにコミュニティにおける経済エンパワーメントに貢献できているのか、講義を通して有意義な学びをえることができました。

最終日は朝の礼拝にはじまり、今後の計画にむけて全体で協議をしました。これに先立ち、山田公平 A P A Y 総主事より挨拶があり、参加者が未来へ進むための言葉がかけられました。山田氏の言葉は参加者に強い印象を与え、参加者たちが未来に向けてなすべきことを明確化する上で多くの示唆を与えるものでした。当セッションはDr. Pat氏、Dr. Ann氏、Ms. Cristina Dalope (アジア・太平洋 Y M C A 同盟主事) によって進められ、A P A Y において現在、未開発の分野のことも含めて協議されました。そして、インドからの参加者による国、地域レベルでの模索が語られた後タイ、日本が続き、ワークショップを通して学ばれた事のまとめが発表されました。



(Anjan Mukherjee 主事 (インド Y M C A 同盟 ナショナル プログラム & 女性エンパワーメント & ジェンダー、メディア & コミュニケーション) の報告より引用)

日本に帰国して以来、Pune のことを思い出さない日は一日たりともありません。出会った人々、訪れた場所、食事、すべてが私にとって新しいものでした。そしてそれら全ては刺激的なもので、いつも一日の終わりには力尽きてすぐ寝てしまいました。しかし、ワークショップの中で、女性エンパワーメントがいかに大切なものなのかと考え続けるのは非常に大変なことでした。今後プログラム中に作ったアクションプランをもとに、将来的には多くの人を巻き込んで行きたいと思います。このような機会を与えてくださったことに深く感謝します。

疋嶋 英理子 (神戸 Y M C A ユースリーダー)

ジェンダーとは社会的に構築された男女の役割、責任のことです。セックスとは生物学的なものです。ジェンダーとは社会的な期待であり、男女の関係性に基づいた概念です。我々にとって、こういった期待に基づくジェンダーの影響を完全に理解するために、社会の様々なレベルにおける貧困とエンパワーメントについて深く知る必要があります。セックスではなく、ジェンダーと言う視点で考える事が必要なのです。完全な満足を得るためにはベーシックニーズ (あってしかるべき食事、衛生、住居、ヘルスケア) と戦略的なジェンダーニーズ (周りからの気付き、自信、自由、意思決定、尊敬) の両方が必要です。本当の意味で女性の立場に変化とは、後者がちゃんと満たされたときに起こるのです。我々の役割とはこの変化を起こすことなのです。

山田 公平 (アジア・太平洋 Y M C A 同盟総主事)

このような素晴らしいワークショップを提供していただき、サポートをしてくださったインド Y M C A 同盟、プネ Y M C A 両者に対し、感謝申し上げます。

* 日本からは、武田寿子氏（神戸Y M C A理事長・ジェンダー委員長）、疋島英理子氏（神戸Y M C Aユースリーダー、2009地球市民育成プロジェクト研修生）が参加しました。

5. パキスタンの洪水および復興計画について



パキスタンにおける洪水被害に対し、ラホールY M C Aは引き続き緊急支援を行っています。先日10月2-9日には、アジア・太平洋Y M C A同盟主事Cristina Dalope氏がKot Addu, Muzaffargarhにおける活動に参加し、支援物資配布に関する評価活動、運動強化に向けての話し合いを行いました。村はラホールから南へ来るまで8時間ほど行ったところであり、南部Pujabに位置しています。当地域は洪水により深刻な被害を受け、今でも水が残っています。

ラホールY M C Aはまず8月に北部のNoshera, Charsadda and Risalpurにて支援活動を開始しました。9月にはさらに別の支援チームが結成され、10kgバッグの小麦、米、砂糖、豆、調理用油、茶、乾燥ミルクの配布がMuzaffargarhにて始まりしました。ラホールY M C A総主事からのメッセージによると、「パキスタンにおける洪水の被害者への救済活動を支援するために多くの運動が起こってきたことを幸運に思っています。食料支援という、洪水後の困難な状況を分かち合うための活動を行ってこることが出来ました。皆様のご支援と祈りに感謝申し上げます。」



カナダ、ドイツ、日本、マカオ、スリランカ、台湾、タイ、アメリカの各Y M C A及び、Y ケアインターナショナルによるパキスタン救済活動へのご支援に対し感謝申し上げます。

6. 私たちの活動 最新情報

オーストラリアY M C Aに新CEOが就任

8月31日に、Y M C Aオーストラリアの新CEOにMs. Katherine Pengillyが着任されたことにお祝い申し上げます。Pengilly氏はCEO of the Sustainable Melbourne Fund、COO/Deputy CEO of Save the

Children Australia、Europcar and the St. Kilda and Carlton Football Clubs幹部といった活動で培ったリーダーシップとマネージメント能力で知られています。

「前CEOのBob Nicholson氏のリーダーシップによって達成されたものを土台に、Pengilly氏は高い品質、経験、資質、使命を持ち、オーストラリアY M C Aを成長させ、イノベーション、リーダーシップを発展させていくことでしょう。(オーストラリアY M C A理事長Mr. Alan Morton)」

前CEOであるNicholson氏の献身に、心から感謝申し上げます。

ミャンマーY M C Aが2010年主事基礎トレーニングを実施

9月13-30日、ミャンマーY M C A同盟人事・研修部門は主事基礎トレーニングを、ローカルY M C Aとエキュメニカルパートナー団体より参加した28名に対して実施しました。当プログラムは若いスタッフが「Y M C Aにおけるプロフェッショナルな主事」という役割を通して、将来リーダーシップを担える人材を養成することを目的とし



ています。良い主事になるためには、キリスト教の道徳とリーダーシップを熟知し、コミュニティやY M C Aとともに活動することが求められます。

エクスポージャートリップが参加者には用意され、ストリートチルドレンや高齢者、老人ホーム居住者といった存在について学びました。当プログラムは1年に1回実施され、3年以上参加した者は、香港で行われるアジア・太平洋Y M C A同盟のアドバンススタディーへ参加することができます。（ミャンマーY M C A同盟主事 Jonathan Paw）

日本Y M C A同盟が第2回地球市民育成プロジェクトを開催

（日本Y M C Aのユースリーダーでアジア・太平洋Y M C A同盟ユース委員の伊藤剛士氏による経験の分かち合いです）



第2回Y M C A地球市民育成プロジェクトが8月20-26日に東山荘で実施されました。43名のボランティアとスタッフが韓国、香港、台湾、マカオ、日本から参加し、地球規模課題への理解の深化とリーダーシップ育成が行われました。

プログラムの一環として、アジア・太平洋Y M C A同盟主事のMaria Cristina A. Dalope氏が特別ゲストとして基調講演とワークショップを行いました。Dalope氏の考えを共有し、Y M C Aにおける地球市民の重要性と、なぜ地球市民教育をユースに行く必要があるのかについて説明されました。ここ数年、この課題はアジア・太平洋同盟の一連のワークショップや会議でも議論されてきました。そして参加者に対して、ユース運動とY M C Aが持つ考えの重要性に対する理解を促す上で役立ってきました。

ワークショップで行った「貿易ゲーム」では、今日のグローバル化が進む社会の現実を学びました。さらに、経済格差がどのように起こり、経済活動と貿易の中で人々がそれに対してどう思うか学びました。フィールドワークでは貧困、差別、多文化社会、といった日本社会における課題を抱える地域を訪問しました。そして、それらに取り組むNGOやY M C Aを訪れた上で、どのようにグローバルゼーションと繋がっているかについて話し合いました。



本プログラムの特徴は、ただリーダーシップに対する理解を深めるだけに留まらない点にあります。参加者は4W1Hを明確化したアクションプランを作り、それぞれの地域コミュニティに戻った後に実行することが求められます。半年間の実施を経て、最終報告書の作成と発表が来年3月に行われます。多くの参加者はアクションプランを参加者以外の人を巻き込む形で実行し、中にはY M C Aのメンバーも含まれ、お互いに関係を継続させていきます。これは国内外におけるユースのネットワークを強化することになります。そしてさらには、ユースがリーダーシップの発揮に向けて、高いモチベーションを維持し続けることにも繋がります。

Y M C Aにおける地球市民教育は数年前から始まった試みです。これは我々にとって挑戦であります。ユースを育成することは我々に対して、グローバル社会における責任とリーダーシップを育てる責務を気付かせるものです。我々はこの運動がすべてのアジア・太平洋Y M C A同盟加盟国に広がり、多くの若いリーダー達が育っていることを望んでいます。皆様のご支援に御礼申し上げます。

「今、日本が様々な問題を抱えていることは知っているものの、私はどうやったらそれが解決できるのかわかりません。しかし、例えその方法がわからなかったとしても諦めるつもりはありません。だからこそ私はこのプログラムに参加しました。私は自分が地域に対して何かできると

信じているし、まずは何がこの国における問題なのか調べるつもりです。そして実践にうつします。地球民育成プロジェクトは非常に刺激的で良い経験になったと感じています。」

(住吉紗知：北海道Y M C A 専門学校学生)

「このプログラムには参加したことは夏休みの中で最高の思い出になりました。当初、私にとって英語でコミュニケーションをとることは非常に厳しいものでした。しかし、多くの友人ができ、地球市民となるためになにをすべきか議論することができました。今こそ行動に移すときだ！そう私は考えています。まず私は自分の学校で始める予定です。」

(原奈都美：北海道Y M C A 専門学校学生)

Bangladesh Y M C A ユーストレーニング(価値教育について)

Bangladesh Y M C A 同盟は8月12-16日、ダッカ、サバルにあるY M C A トレーニングセンターでユーストレーニング(価値教育について)を実施しました。当プログラムは価値教育をY M C A の若いメンバーに対して提供することが目的であり、10のローカルY M C A から26名、2名の主事が参加しました。



プログラムは礼拝、コミュニティビルディング、エクスポージャー、リーダーシップに関する講義、人材養成、開発計画の作り方、総括によって構成されました。各ローカルY M C A はそれぞれの価値教育活動に関する活動紹介する場所を提供されました。世界大会に参加した2人のユースリーダーは、その活動や生まれたつながりを紹介しました。Balmi Chisim氏はミレニアム開発目標をY M C A と共に実現する意思を伝えました。主事のBappu Mree氏はEASY Net(Ecumenical Asia Pacific Students and Youth Network) についての紹介を行いました。



参加者は各セッション後に討論に加わり、グループミーティングにおいて創造的な自らの考えを共有しました。最終的にはクリエイティブなカルチャーショーとキャンペーン用スローガンを作り、各ローカルY M C A を通して Bangladesh 全体で推進される予定です。

Bangladesh Y M C A 同盟理事長のMr. Symon P. Adhikary および総主事のMr. Duncan Chowdhuryは参加した上でそれぞれの考えについて語りました。3日に及ぶトレーニングは主事のBipul Alite Gonsalves氏およびTapan Karmakar氏によって行われました。

(Mr. Duncan Chowdhury： Bangladesh Y M C A 同盟総主事)

光州Y M C A が90周年祝賀行事

10月7-9日、韓国の光州Y M C A で90周年記念式典が祝われました。光州は「光州事件」でよく知られており、この事件がきっかけとなり韓国は独裁から民主化へ歩み始めることとなりました。30年前の1980年5月、民主化を掲げ独裁に反対した学生を主体とした500人以上の人が殺されました。この事件は光州Y M C A 目の前で起こりました。Y M C A は民主化運動の中で主体的な役割を担ってきました。韓国のY M C A、特に光州では力強く、かつ独特な市民社会への使命が果たされてきました。記念行事の一環として、2020年に向けた新しいビジョンが採択されました。

クライストチャーチY M C A がOutdoors New Zealand Awardsを受賞

今年Outdoors New ZealandはクライストチャーチY M C A をアウトドア部門のリーダーと認め、特に質の高い野外活動を子どもや青少年に提供してきたことを高く評価しました。「The Education Outdoors New Zealand Programme Award」はクライストチャーチY M C A のワイヌイ公園における休日キャンプとリーダーシッププログラムに対して与えられたものです。ワイヌ

イ公園はクライストチャーチ Y M C A にとって80年間中心的、かつ強く特徴づけるものであり続けてきました。表彰式は9月24日に行われました。毎年、カンタベリーの何百という学校から何千もの学生がワイヌイ公園のキャンプに参加しています。学校が休みの間、ワイヌイは7-17歳の子どもたちに対して、年齢や関心に応じた様々なキャンププログラムを提供しています。

(Andrew Hopper, Camp Manager : YMCA ワイヌイ、ニュージーランド)

7. エキュメニカルニュース：関連団体/ネットワークより

EASY Net週間2010

10月17日-24日、各National Ecumenical Team (NET)は一斉に「草の根活動を通してユースを平和構築に」というスローガンを掲げつつ、EASY Net週間に入ります。今年のテーマはユースを平和構築に巻き込んで行くという我々の活動を反映したものとなっています。我々は皆異なったレベル、形での暴力に直面しており、本テーマは平和構築に向けて我々の活動をより一層強化することを目指しています。今回は、ローマの信徒への手紙第14章19節「だから、平和や互いの向上に役立つことを追い求めようではありませんか」を通して理解を深め、さまざまな形式での式典を行います。

EASY Net週間の祝賀行事は年一回あり、各NETにより合同で様々な行事が執り行われます。例えば、合同礼拝、エクスポージャー、音楽イベント、ディスカッション、さらには聖書研究なども加えたfull-blown national gathering等が予定されています。このユース週間は毎年10月の第3週に行われています。詳しい案内は各Netに配布されており、もしくはEASY NetコーディネーターのMs. Cristina Miranda (easy_net@ymail.com)までお問い合わせください。皆様の積極的なご参加を期待しております。

ニュージーランド クライストチャーチにおける地震

ニュージーランド Y M C A 主事 Ric Odom からのレポート

皆様もご存知のとおり、9月4日(土)現地時間午前4時20分頃に、ニュージーランド南部最大の都市クライストチャーチ(人口約372,000)でマグニチュード7.1の地震が発生しました。ニュージーランドはこれまでも多くの地震を経験してきましたが(ありがたい事に、ニュージーランドは多くの断層線上にあり、いくつかの活火山も存在しています)。しかし、今回の地震は16,000年もの間ほとんど活動していなかった断層線によって引き起こされました。私は400km離れたウェリントンにてこの地震を感じました。

4週間以上経った後も、被害はいくつかの地域に残っており、幾つかの地域では下水道が使えない状態になっています。申し上げているように、クライストチャーチは破壊し尽くされた訳ではなく、ほとんどの都市は普段と変わりなく機能しています。しかし、もちろん自然がもたらす破壊性に対する恐怖は住人の中にも残り続けています。今までのところ1,400回以上の余震が報告されており、中にはマグニチュード6に近いものも含まれています。幸運にも、また信じられないことに死者はゼロでした。

クライストチャーチには国内第2の規模を誇るY M C Aの拠点があり、こちらもまた大きな被害を受けました。スタッフはすぐに被害状況の調査と復旧に向けた調整に取りかかりました。スタッフの中には家が深刻な被害を受けた者もあり、時に恐怖に襲われつつも作業を続けたのです。

クライストチャーチ Y M C A CEO の Josie Ogden Shroeder 氏とスタッフ一同は、ニュージーランド内外の Y M C A からの支援表明に感謝しております。

8. お詫びと訂正

前回の E-news に関して一点訂正があります。「ユースの声」欄で Ms. Balmi Chisim Tora の所属が Dhaka Y M C A となっておりましたが、正しくは Birisiri Y M C A でした。謹んでお詫び申し上げます。

9. 今後の予定

日程	プログラム	場所
2010年10月19日～24日	第3回アジア太平洋 Uni-Y 会議	
2010年10月22日～11月11日	Y M C A 及び宗派を超えた NGO スタッフのための平和学校(SOP)	スリランカ・コロンボ
2010年11月14日～12月12日	第28回アドバンストコース	香港
2011年1月14日～15日	カンボジア Y M C A P S G 会議	カンボジア
2011年1月22日～24日	東アジア Y M C A フォーラム	韓国
2011年3月8日～12日	常務委員会	香港
2011年9月4日～6日	第2回アジア・太平洋 ユースアッセンブリー	マレーシア・ペナン
2011年9月6日～10日	第18回アジア・太平洋 Y M C A 大会	マレーシア・ペナン

10. 総主事デスクより... インド Y M C A、力強く前へ

9月16日から2週間、インド Y M C A 同盟委員会、ジェンダーワークショップ、そしてインド東部地域（最も貧しいといわれている地域）の Y M C A を急ぎ足で訪問してきました。その感想などインドについて報告します。

インドと日本は、私の知る限りほとんど交流がなかったと思います。唯一、京都 Y M C A が東部にあるランチ (Ranchi) Y M C A と長い交流を続けてきたということ、そしてここ数年同盟の研修でインド訪問(ランチなど)をしてきたという限られたものです。インドの多くの Y M C A は、ヨ・ロッパ、北米から支援をうけてきたという経緯があります。日本以外のアジアとの交流はほとんどありませんでした。

インドは、アジア・太平洋地域の最大の Y M C A です。加盟 Y M C A は 588 にのぼり、準加盟が 350 程度、そのほかに Y M C A 設立の可能性を考えているところが 100 近くあるということです。しかし、ほとんどの Y M C A はスタッフレス、建物もないということも今回わかりました。実際には、建物を持ち、資格のある主事を抱えている Y M C A は 60～70 くらいではないかと思えます。主事養成は、9ヶ月のコースを独自に持ち、2年の経験を持つ30歳以下のスタッフを対象に毎年バンガローで行われています。徹底的にキリスト教の現代的使命を学び、貧困などへの取り組み方を学びます。そして、参加の条件として受講後5年間は、Y M C A で働くこととしています。したがって、20代で研修を受けた主事たちは、ほとんどが Y M C A に残り、使命を果たそうと努力しているというのが私の印象です。しかし、最近は、他の企業などと比べて条件の悪い Y M C A に勤めようという新採用者が減り、この研修も参加者減に悩み、参加者は大型のいくつかの Y M C A に限られてきているということです。現在 140 名近くの主事資格者がいますが、その8割は大型の Y M C A (同盟、ニューデリー、ボンベイ、マドラス、ランチ、バンガロー、カルカッタなど) にいて、総主事だけが主事という Y M C A が 40～50 あるという状況です。

インドの特徴とも言えるのは、南にある最も小さいケララ州に Y M C A の半分以上が存在しているということです。そのほとんどがボランティアだけで運営されている農村地域の Y M C A で

す。それでも加盟 Y M C A は代表者一人を同盟委員会に送ることができること、役員の選挙には正会員の数によって投票権者が与えられているので、クリスチャンの多いケララの Y M C A が常に多くの投票権を持ち、最近の同盟理事長や同盟総主事がみなケララ州出身であるということからいかにケララの影響力が大きいかが分かります。ケララは小さな農業中心の州であり、人口の 23% がクリスチャン（インド全体では 3% 程度）であり、高等教育も最も進んでいるという州です。しかし、ケララ内では仕事が限られているので、優秀な人材が国内外各地に出ています。海外（イギリスや中東諸国）で成功しているインド人にはケララ出身者が多いということ、またニューデリーやボンベイなどの大都市に行き、熱心に Y M C A にかかわっている人もケララ出身者が多いということで、教会や Y M C A では、どこでもケララの影響を感じざるを得ないという現実が見えてきます。ケララでは農村地区にいるクリスチャンが自分たちでお金を出し、ボランティアで Y M C A 運動を起こし、ボランティアの総主事や会計係を置いて Y M C A を運営しているところが大半です。そういう Y M C A を体験した人たちがインド各地に行って Y M C A を生み出す原動力になっていることも事実です。

今回、訪問したのは東にあるボブネシア Y M C A、タンキベラリー Y M C A、ランチ Y M C A、そしてパトナ Y M C A です。それぞれ特徴のある Y M C A で、簡単に紹介します。

ボブネシア Y M C A (Bhubneswar) :

主事一人、スタッフ総勢 9 人の Y M C A です。2008 年 8 月に反キリスト教を訴えていたヒンズー教指導者が毛派の過激者によって暗殺されたことがきっかけで、ヒンズー教過激派がキリスト教会や家族に集団暴行や放火をしたというニュースを日本でも聞いたことがあります。80 人以上が殺害され、1 千軒以上のクリスチャンの家や教会が放火されたということで、避難したクリスチャンが大挙してボブネシアになだれ込みました。しかし、人口の 3% 弱がクリスチャンというボブネシアでは、彼らをかまくったりしたら自分の家族も危ないという危機感を持ち、門を閉ざしていたということです。唯一、ボブネシア Y M C A だけがその建物を開放し、500 人もの避難者を 101 日間かくまったということです。当初は、理事長の家に何度も脅しの電話が入り、その家族までが暴力を受け、理事長宅は警官に護られたということです。そんな Y M C A の努力に対し、市当局が警官隊を Y M C A の周りに配置し、常に暴徒から Y M C A を護ったということです。この功績は州知事からも認められ、小さな Y M C A にとっては大きな励みになったということです。そんなこともあり、理事長はじめ理事の人たちは、将来この Y M C A に、災害（人的）復興センターと研修所を作るという青写真を持っています。その夢がいつの日かかなうことを祈っています。

タンキベラリー Y M C A (Tanki Beraly) :

ボブネシアから 120 キロ北へ行くと少数民族が多く住む地域があり、かつてランチ Y M C A の総主事であったナイキ主事の実家がそこにあったこともあり、彼を中心に Y M C A が設立されました。タンキベラリーとその周辺の集落をあわせると約 3,000 人が住み、医療、教育、福祉などほとんどない地域に、Y M C A が存在します。やはりここに Samal という若者がナイキさんに認められ、Y M C A の主事になり、これまで 10 年近くひとりで活躍しています。2005 年の世界 Y M C A 同盟 150 周年式典がボンベイで行われた際、40 数時間電車できたというこのサマルという若い主事とたまたま出会い、何も無い地域で人々に仕えるという使命を持つこの青年の信仰と無私の精神に驚かされたことを思い出します。今回の訪問で彼の成長した姿とその働きを見ることができました。



2007 年にはとちぎ Y M C A の塩沢さん夫妻が約 3 ヶ月、タンキベラリー Y M C A の 2 階に住み込みで仕事の手伝いをしたということです。地域には病院も学校もないので Y M C A なしでど

うするのかと思うようなところですが、それでも人々は自然と一体で家族や地域で護りあいながら豊かな生活を送っているという印象をもちました。Y M C Aでは小さいクリニックをもち、薬剤師だけが常駐していました。その人の話では、患者の多くがマラリアによる熱で特效薬を与えて直っているということ。昨年一年で 1,200 件ものマラリアらしい熱を訴える患者が来たといっていました。医師はいないので、薬ではなんともならない病気や怪我の場合は、遠くの病院に移せるか、神に祈るだけという言葉に驚かされました。とちぎY M C Aからの寄付が数年前にあったということで、小さな部屋にラボを作って、血液や尿検査をするために使われるということでした。今回の訪問時に私が代わってその開所式でテープを切らせていただきました。とにかくこの主事の献身的な働きと信仰の強さには驚かされ、頭が下がる思いでした。

ランチY M C A (Ranchi) :

ランチは州都であり、人口も 200 万人くらいに膨れている大都市になりました。京都Y M C Aとの交流が長いランチY M C Aにはその建物にも話にも京都Y M C Aのことがよく出てきます。インド国内でもランチYの働きは、積極的に外に出て行くという出前プログラムで、貧しい地域、スラムの子どもややハンセン氏病の患者家族のために貴重な働きを長く続けてきたというY M C Aです。海外との交流も盛んで日本を始め、ドイツやノルウェーからの援助も受けてこれまできました。しかし、海外からの支援に頼る体質から脱却すべく、10 年前から学校を作り、2 箇所ですでに 900 人を超える児童を集めて、これで財政的にはかなり安定してきたということでした。Y M C Aの働きに寄与するため郊外の工場が広大な土地を寄付してくれたということです。ここに学校を作りたいという願いを持って 1995 年当時の総主事ナイキさんが京都を訪れ、Y M C Aとワイズに寄付をお願いし、当時で 300 万ルピー（今日の換算で約 600 万円）を受けて、この地に学校が作られたということです。それが今日 600 人規模の学校になり、さらに拡張して 1,000 人規模の学校にという計画を語ってくれました。今回訪問の際、その京都Y M C Aの寄付によって始まった学校の拡張した 4 教室の開所式に私がまた代わってリボンを切る役割を果たしてきました。校舎には京都 YMCA の酒井さんが献堂式に参加したという金属版が壁に埋め込まれていました。

このように学校が伸びているランチY M C Aの総主事サンガさんに日本のY M C Aの 80 年代から 90 年代の経験をお話しました。インドは経済的には登り坂にあります。しかし、他の企業や学校も同様に英語を媒体とした学校を伸ばしており、激しい競争が始まりつつあります。いつの日か、需要と供給の関係が飽和状態になったとき、生き残る学校は何かを学ぶ必要があるというようなことを言いました。これまで散々苦労してきたランチY M C Aにとっては、この昇り調子の学校をさらに大きくするという気持ちは分ります。そして学校で得た資金でコミュニティプログラムを維持させようという考えには慎重に考えていくべきという話をしました。

パトナY M C A :

ランチからさらに西へいったところに仏教で有名なパトナがあります。釈迦がここで悟りの境地に至ったところということで、日本からも成田からの直行便があるところです。

パトナY M C Aは、小さいながらよくここまでできるなど感心するほど、社会問題にみんなで取り組んでいるというY M C Aでした。総主事と 8 人のスタッフがいて、主に 3 つのプログラムを運営しています。一つは、スラム地域の子どもたち 40 数名を集めた青空教室です。自前の建物がなく、教会敷地内の施設を YMCA として借用しています。教会には学校があってユニフォームを着た子どもたちが朝から同じ敷地内の学校で勉強しています。Y M C Aの学校は放課後、午後 3 時からスラム地域の子どもたちを集めて、敷地内の芝生の上で 6 時まで勉強するというものでした。学校には行けない子どもたちで 3 歳から 14 歳までの子どもが学んでいます。子どもたちの輝く目と好奇心に満ちた表情に圧倒される思いでした。この学校は会員たちの寄付によって成り立っています。

2 つ目のプログラムは、女性支援の相談所でした。毎日 2 人のスタッフがさまざまな問題に悩む女性の訴えを聞き、相手の家族を呼んだり、弁護士に相談したりして問題を解決するというものでした。そこにきていた 3 人の女性に、彼女たちの抱える問題を話してもらいました。ほとんどが Dawry (ダウリ) と呼ばれる伝統的なインドの結納のような制度に起因する女性にとっては非常に不利なものでした。結婚の条件として、女性は男性の家族に対して多額のお金かもの (自動車、冷蔵庫、テレビなど) を要求されるという制度で、それが結婚への条件になります。家庭



内で暴力を受けたり、離婚をする場合にその財産は女性に返されないことが多く、その相談が多いということです。また、そんなこともあるので女性は教育を低く抑えることが当然のように考えられています。結婚相手として、女性より高い学歴が求められる男性社会のインドでは高学歴の男性には高額なダウリが求められるからです。一人の女性は、妊娠して検査をしたら女の子だと分ると、その家族が将来のダウリのことを考えて 2 回も堕胎を強制させられたと言っていました。彼女の嫁ぎ先の家族は、結婚した後ももっと金を出すように女性の家族に迫り、女性はどうすべきか相談に来ていました。こんな相談者が平均して月に 25 件程度あるそうです。この事業は、行政の委託で行っていました。

3 つ目の事業は、収入を得る事業で街の中心街にセンターを借用してコンピュータ教室を大学生対象に行うというものです。3 ヶ月前に APAY Partnership Project (APP) でアメリカから 5,000 ドルの支援を受け、新しいコンピュータを導入、教室も改装してこの 3 ヶ月で 20 人から 40 人に受講者が伸びたということでした。感心したことは、これらの受講生の半分以上が Y M C A のボランティアとしてかかわっているということです。一人の主事の意識がこうも Y M C A プログラムに影響を及ぼすものかとその大切さを感じました。

今回はインド東地域の小さい Y M C A を訪問し、インドの新たな一面を見ることができました。後半の 5 日間は Pune (西側) にある Y M C A で行われたジェンダーのワークショップに参加してきました。日本から武田寿子さん、疋島英理子さん (神戸 Y M C A ユース) が参加して、ゆっくりとジェンダーと女性のエンパワーメントについて学びました。男性側の理解も必要です。制度上の改革も必要です。そして女性自身の意識の改革も必要です。このようなジェンダーに関するトレーニングが何よりも Y M C A に必要であることを痛感しました。A P A Y では、このようなトレーニングを実施するためのリーダートレーニングや理事や総主事レベルに向けてのジェンダーに関する話し合いを求めていると考えています。アジアでは女性を正会員として認めていないという Y M C A もあるということです。

これまであまり知らなかったインド Y M C A のことが次第に分ってきました。彼らにとり、日本は不思議なすごい国という印象があるということも感じました。日本の Y M C A との交流を望む声も多くの Y M C A から寄せられました。インド自身がアジアに目をという方向に変わりつつあるということです。是非一度インド訪問をお勧めします。

アジア・太平洋同盟

総主事 山田公平

主任主事 Cristina A. Dalope & Jose Varghese

アジア・太平洋 Y M C A 同盟

23 Waterloo Road, 6th floor, Kowloon, Hong Kong
tel. 852-2780 8347, 2770 3168, 2783 3058; fax 852- 2385 4692
e-mail - office@asiapacificymca.org
